

よもやま話に花が咲く。えきんぐらがお届けする小ネタ袋。

蔵通信

十九号
2009.8



第十八話 母の祈り

シリーズ
絵金百話

発行：絵金蔵運営委員会
発行日：2009年8月1日
〒781-5310
高知県香南市赤岡町538
Tel.Fax 0887-57-7117
ekingura@mxi.netwave.or.jp
<http://www.ekingura.com/>



お問い合わせ…弁天座
TEL 0887-57-3060
主催／弁天座運営委員会
チケット販売所／弁天座・高知プレイガイド・のいち駅
かるぽーと他
財）高知新聞厚生文化事業団助成事業

忠臣蔵

花の巻・雪の巻

1954年作品
出演
松本幸四郎
(白鸚)

2009
12月13日(日)

弁天座
映画上映会

於 香南市赤岡町
弁天座



上映時間

① 9:30~11:00
② 14:00~15:30

入場料
1,000円
(当日1,300円)

絵金屏風修復・保存活動へ —ご寄附のお願い—

赤岡に残る絵金の屏風絵23点は、幕末より祭礼文化とともに地域の所蔵家の手によって伝えられてきました。平成17年からは絵金蔵の収蔵庫に保管されていますが、約150年の時を経て、絵の具の剥落を中心とする傷みがありここに見られるようになっていきます。

現在、赤岡では従来それぞれ活動していた4地区と個人の所蔵家がひとつになり「赤岡絵金屏風保存会」を立ち上げ、絵金蔵運営委員会とともに屏風絵とそれを飾る祭礼文化をより長く後世に伝えていくためのさまざまな活動を行っています。

どうか、赤岡の絵金屏風の修復・保存とそれのための活動に、皆さまのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

赤岡絵金屏風保存会・絵金蔵運営委員会



土佐香美農業協同組合 赤岡支所
普通口座 0006101
赤岡絵金屏風保存会 会長 武市徹
(アカオカエキンビョウブホゾンカイ カイチョウ タケチトオル)

〔絵金蔵〕

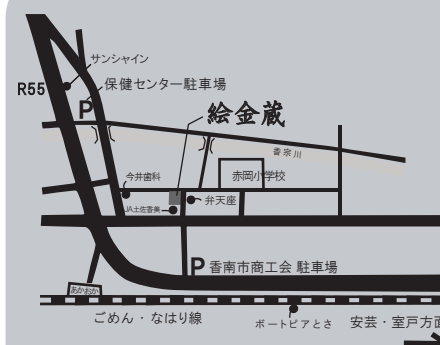
開館時間
午前9時～午後5時
(入館は午後4時半まで)

観覧料

大人500円、高校生300円
小・中学生150円
(15名以上の団体は各50円引き)

休館日

毎週月曜日
(月曜が祝日の場合は火曜)
12月29日～1月3日



幕末土佐の芝居絵師・金蔵(通称・絵金)。彼は土佐各地の祭礼に多くの芝居絵屏風を残しました。絵金蔵は、平成17年2月、赤岡の地に残る23点の芝居絵屏風を収蔵・保存するために作られた施設です。

絵金蔵の三つの使命

年一度
：絵金の文化を
守るため
伝承
：次の世代へ
伝えるため
縁結び
：地域を超えて
世代を超えて

絵金百話

第十八話 母の祈り

はなごろも えんぎ わし だん
花衣いろは縁起 鷺の段

(旧称：二月堂良弁杉の由来)

< 概要 >

『花衣いろは縁起』は寛保2年(1742)2月14日、竹本座にて初演されました。作者は三好松洛、竹田小出雲。絵金が描いた本作はこれまで「二月堂良弁杉の由来」と称され長く親しまれてきましたが、『二月堂良弁杉の由来』は明治20年(1887)2月4日、大阪・いなり彦六座の初演で、絵金の亡くなった年、明治9年(1876)にはまだ制作されていなかったことになります。一方『花衣いろは縁起』は鷺の段が独立し、寛保2年より幕末まで上演されました。

この子供が鷺にさらわれ、それぞれが苦勞の末に再会を果たすというストーリーは平安時代より多くの物語に取り入れられてきました。『日本霊異記』や『今昔物語集』には但馬国の人の幼児が鷺にさらわれ、数年を経て丹波あるいは丹後の国で再会する話、また良弁の説話は『宝物集』『沙石集』『元亨釈書』にみえます。さらに古浄瑠璃、『玄恕上人由来』(延宝2年<1674>版)は、田中左衛門尉とこがうの前の子三之助が近江の平の里で鷺にさらわれ苦難の末に再会するという話で、『花衣いろは縁起』のルーツとなった作品の一つと考えられます。明治に入ってから『二月堂良弁杉の由来』に先行する『四国三十三所観音霊場記』『石山寺わしのだん』(明治12年<1879>)で同様のストーリーが展開されました。

今回ご紹介する『花衣いろは縁起』は狩野文庫蔵床本をもとに、高知県で活躍する唯一の義太夫、竹本美園氏と文楽座の義太夫竹本津国太夫氏により活字に起こしていただいたものを参考にしています。物語は後陽成天皇の時代(1571-1617)、甲州松江侯の家老、山中市正義幸の弟、山中左衛門尉義継が京に滞在中、勝間将監という武将の遺児小督との間に一子三之助をもうけたことから始まります。妻子への愛情から義継は近江志賀に農夫とし隠れ住んでいましたが、山中家と義継の許嫁である東條家には義継が行方をくらませたことにより確執が生れ、さらに兄義幸は暗殺、後嗣が途絶えました。志賀では三之助が鷺にさらわれ、夫婦が狂乱し探しあぐねているところへ山中家家臣、渡辺清夫妻が二人を見つけ出し、力を合わせて義幸の仇、強盗赤坂童子を討ち取ります。一方さらわれた三之助は江戸の幡随院随波上人に拾われて玄恕と名づけられ、その法談の席で母子は再会を果たすこととなります。

絵金が描くこの物語、毎年絵金祭りでも人だかりの絶えない、古くから人気のある作品です。中央に真っ赤な着物をひるがえし、必死の形相で子供をつかもうとする母、その左に金色の目を光らせた獺猛な顔をした大きな鷺、背景にはのどかな田園を配し、日常に起こった一瞬の悲劇を見る者の脳裏に焼きつけるように描き切っています。今回もどうぞお楽しみあれ！



平成の世とは思えない、懐かしい風情…

平成21年 7/18・19
絵金祭り点描



今年初めてお目見えした、おば人形。作者は地元の澤田美枝さん(以下の人形も全て)。最近亡くなった赤岡のアイドル、横矢登志さん(通称：おば)を偲んで作られました。



なぜか魔女も…



絵の側に座る人形。暗くなるとそのリアルなたたずまいに話しかける人、お賽銭をあげる人まで続出！



屏風のそばでお守をする門脇嘉壽見さん(左)。屏風絵を我が子のように大事にされてきた所蔵家のおひとりです。



日暮れを待ちかねた人々でにぎわう商店街。赤岡町本町四区付近。



今年8月4日から7日まで絵金蔵に職場体験に来てくれた赤岡中学校3年本田大輔君と2年吉本海里君。接客、掃除、看板立てから、グッズの商品企画まで、短期間にたくさんの仕事をこなした2人でしたが、声を出す接客、パソコンの扱いには少し苦勞したとのことでした。写真にあるのはワークショップ用に2人が作ってくれた、絵金の模写を貼った提灯。

飛び出せ！学校
赤岡中学生訪問記

今年6月、絵金蔵・弁天座を訪れた中学生。施設見学のと、弁天座でエコバックを作りました。このエコバックは絵金蔵で普段ボランティアが作っているもので、会期の終わった催しのポスター・チラシを使っています。紙バックの要領で初めての方も簡単。学校のみんなに流行らせてくださーい！！



こどもたちへつなぐ

～土佐絵金歌舞伎伝承会の「二月堂良弁杉の由来」～

復活！手長足長絵馬台

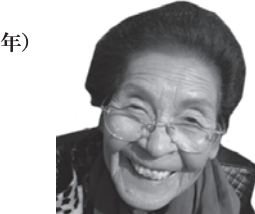


今年秋の「四国の時芝居」公演に出演の駕籠かき役・伊藤公愛さん（左）と、弁正役・片山透さん（右）

土佐絵金歌舞伎伝承会は、町の財産である絵金の屏風絵に描かれている物語を実際に演じてみよう、また江戸時代より商都として栄え、絵金が生きた当時も大変盛んであった宮芝居を復活させようと赤岡の有志が結成しました。平成5年7月17日、記念すべき絵金祭り公演第一回の演目は、「二月堂良弁杉の由来」。当時の写真と共に、現在も芝居小屋「弁天座」を拠点に続く絵金歌舞伎伝承会の歩みと未来への思いをご紹介します。



第1回公演（平成5年）パンフレット



赤岡のアイドルおばば（故、横矢登志さん）。弁天座の復活をはじめ町づくりにはったその思いは町のあちこちに受け継がれています。



第11回公演に出演、良弁僧正お付きの小坊主たち。



思わず話しかけてしまう!? おばば人形。



「おばばより」の染め抜きの入った弁天座・鳥屋（とや）ののれん。

次世代のこどもたちへ～

立ち上げから、現在まで事務方、裏方として絵金歌舞伎を支え続けて来られた、横矢佐代さん。ずっと思い続けているのは未来にこの文化をどう伝えるか。小さい頃子どもたちだけで「義経千本桜 鮎屋」を演じた地元の女の子が、今年の夏の公演を見てまたやりたいね、といってくれたをとっても嬉しそうに話して下さいました。例年子役で出演する子供たちは、小学校高学年を過ぎると塾やクラブ活動が忙しくなり、続けられなくなることも多いとか。それでも小さな胸のなかに種を植えていくことが未来につながる、17年間の奮闘を経て、さらに未来を見つめる横矢さんの言葉です。



本職は赤岡の食事・酒処「食蔵」のオーナー。



鷺にさらわれ、行き別れとなった良弁親子が経て再会する感動の場面。良弁役はJA土佐香美に勤める竹村英紀さん。母親役は赤岡で繊維業を営む杉村信夫さん。第11回公演。

絵金蔵に隣接する弁天座。平成19年オープン。絵金蔵と同じく、現在ボランティアで構成する弁天座運営委員会のメンバーも参加した旧赤岡町時代の町づくりワークショップにおけるアイデアや議論のなかから生まれました。明治から昭和40年代にかけてこの場所にあった芝居小屋を復活させたものです。

今年7月24・25日、香美市土佐山田町八王子宮の夏祭りに出された手長足長絵馬台（市指定文化財）。祭りでのお目見えは実に29年ぶりです。この絵馬台は高さ約4m、幅約10m、現存する絵金の芝居絵を飾る絵馬台としては県下最大規模。幕末から明治のはじめにかけて土佐山田の宮大工、原卯平（はらうへい）が作ったといわれています。

山車や社寺彫刻を研究する水野耕嗣・岐阜高専名誉教授によると、絵を見せるために正面の柱を途中で省略したり、手長足長の彫刻を施す点は大変ユニークで興味深いとのこと。



足長（あしなが）

これまで八王子宮の神庫で大切に保管されてきた絵馬台ですが、部材の結合部を中心に傷みが進んでいること、膨大な部材を運び組み上げるには技術と人手がかかることなどから再び飾ることができないのではと危ぶまれていました。しかし今年「祝祭に捧げた夢—絵師金蔵の悦楽と悲哀—」展（絵金蔵運



省略された正面の柱



虎の繊細でユニークな彫刻

営委員会主催）での出陳をきっかけに宮司さんはじめ地元の総代さんや氏子さんらが立ち上がり、再び本来の姿がよみがえりました。今後も少しずつ修復しながら、数年に一度は公開を続けたいとのこと。年に一度の夏祭り、その夜のわずかな時間のためだけにつくられた豪華な絵馬台。激動の時代、転換期の土佐の民衆のパワーを伝えるかけがえのない遺産のひとつです。

ろうソクと台提灯

—安芸市・東浜八幡宮祭礼—

今年7月に行われた高知県東部、安芸市・東浜八幡宮祭礼。ここでは5点の屏風絵が木製の枠（台提灯）にはめ込まれ、拝殿の脇に飾られます。同市・川北大師堂はじめ春野町や南国市でもよくみかける形で、ひさしの辺りに提灯をかけるのが一般的ですが、ここでは柱の部分に垂直に木を挿し込み、ろうソクを立てて見る珍しい風習があります。数年前から火災など事故に配慮して立てなくなったとのことですが、今回特別に再現してもらいました。

浜風に絶えずゆめくかすかなろうソクの炎。かつてこの屏風絵を地面に立てろうソク一本の明かりで見ていた、その名残かもしれません。



屋台が並ぶ参道。



ろうソクを立てた台提灯。



幅約180cmの屏風絵が横一列並ぶ姿は壮観。台提灯は古い形に習い、10数年前に作られたそうです。

■ 心も空に叫ぶ子の、 声もかすかの遠山の…

鷲にさらわれる三之助。夫婦の溺愛ぶりがいっそう悲劇を際立たせます。

義継「そなたやおれがこの体になって苦勞するのも三之助がかわいさ。ハテ銭金はわき物。この子宝をもうけと思や。ホホ…牛に乗って心地よいか。宝殿が笑い顔。今一度笑や。」

三之助がたった今まで機嫌よく乗っていた牛。鷲に驚いてあぜ道を駆け戻っているよう。

■ おあ～ッ！

鋤の柄を頬杖に「すっぱたかったるしかみ顔」で夫婦に小言を言っていた長三郎も一瞬の出来事に空いた口がふさがらない様子。

■ のふ悲しや。

連れ去られるわが子に、必死の形相で手を伸ばす小督。

「今日はいかなる悪日にて、思いもよらぬ悪鳥めに取られしわが子を取り返す、思案してたべわが夫」

■ ハヽヽヽヽア！

鷲とわが子を見送ったのち、ただ呆然と立ち尽くし空を睨みつけていた義継。しばらくすると高笑いを始め「あれあれ空にわが子の着物、赤いは赤いは赤い珊瑚樹か紅梅か…すっぱらばんのぼん！」とうたいだし、小督を驚かせます。



悲劇にかいまみる喜劇

絵金の芝居絵でも特に迫力とスピード感溢れる優れた作品です。

画面いっぱいに描かれた、大鷲にさらわれる三之助とそれを追う両親。しかしその背景には抱いた子供が逆さまに落ちようとするのも構わず、あんぐり口をあけて見送る百姓の妻の姿が見えます。その極端に小さく描かれた滑稽な姿は、主役の迫力と悲愴感をいっそう際立たせています。

背景からもうかがえる絵金の力量をどうぞご堪能下さい。

物語る小道具

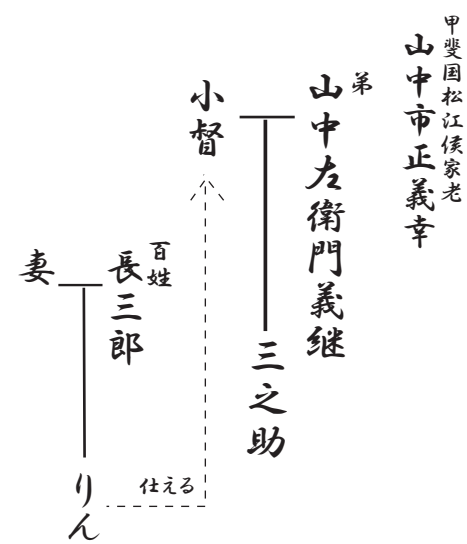
～危険な鳥おどし～

狂乱する夫に「コレわしじゃ女房じゃが見忘れてか」というと義継は「なんじゃ、わしじゃ。鷲はわが子の敵ぞ。」と隣の鳥おどしを手にとって駆け回り、あらぬ方向に矢を射るのです。

物語る小道具～小督がつかんだ片紐～

「これ見たまへこの片紐。三之助を助けんと、取り付くところもあるべきにわずかに細きくけ紐の切れしはつらや母もろとも一緒に鷲の餌食とならば、今の思いはせまいもの…」

花衣いろは縁起 主要登場人物



絵金を読む。

花衣いろは縁起 鷲の段

二曲一隻屏風/紙本着色/ 176.0 × 162.0 cm
赤岡町本町二区所蔵

— あらすじ —

甲斐の国松江家家臣、山中左衛門尉義継と小督は志賀の里にて百姓に身をやつし、息子三之助と幸せに暮らしている。

ある日、三之助を牛の背に乗せ3人があぜ道を仲むつまじく歩いていると隣家の百姓でかつてその娘のりんが小督に仕えていたよしみで何かと世話を焼く長三郎が通りかかる。夫婦は長三郎に畑仕事を一緒にする約束を忘れて寝坊したことや、派手な身なりで人目に付くことなど注意される。夫婦はその親身の意見に礼をいい、別れる。

その後義継は芝刈りをするからと先を急ぎ、母子がその後を追うところへ風と共に鷲がいっさんに下りてきて三之助をつかんだ。小督は三之助にしがみつき着物の紐をとらえたが、その紐はちぎれ、義継もあわてて駆け戻るがあれよあれよという間に舞い上がった大鷲は雲居の彼方に消え、2人は呆然やがて小督は嘆き悲しみ、あまりのことに義継は狂乱してしまう。

〔参考文献〕

*1狩野文庫蔵『花衣いろは縁起』（竹本津国太夫・竹本美園翻刻 私家版）

*2『絵金展 土佐の芝居絵と絵師金蔵』高知県立美術館 1996年

*3『絵金蔵収蔵品目録』赤岡町 2005年2月

*4近森敏夫『絵金読本』香南市商工水産課 2006年3月 改訂版

*5中西貞行『演劇脚本摘要集』（明治28年5月）

*6郡司正勝『「二月堂良弁杉由来」考』『南都仏教』第31号 1973年12月

（*5、6は岡山県立美術館館長・鍵岡正謹氏のご教示による）



あれよあれよと身をもだへ、夫婦手を延べ足つま立て、おどり上がり飛び上り、心にも空に叫ぶ子の声もかすかの遠山の雲や霞に隔たりて…*1。